
タケナラシ

井上 讃恥

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タケナラシ

【Nコード】

N 8 6 2 4 A

【作者名】

井上讃恥

【あらすじ】

生まれつき顔と腰が歪んでいる少年ロクは、村のはずれで、お爺とお母と暮らしている。ある日ロクは、裏のヤブにタケナラシという恐ろしい妖怪が居ること知る。ロクはタケナラシが鳴らす竹の音に魅入ってしまい…

一節

ワシん家は、山の麓の、村からちよつとだけ離れたところにあるんだが、表の畑で野菜はよう採れるし、裏のヤブでは山菜やら茸やら獣やらがよう獲れるし、すぐそばの川はものすごく綺麗で、魚もいる。ワシのお父は死んでいやんが、お爺とお母がおるし、なんも不自由はない。悪いことなんぞ何ひとつない。

今日もお爺とヤブに茸やらを狩りに行った。お爺はもう年で腰は曲がつとるが、険しい山をすういすいと泳ぐみたいに進んで行く。

「おういロク、お爺は行くぞ。はよ来んか、のろまが。」

ワシはロクいうて、この夏で七つになる。村の子どもらは学校に行きよる年やが、ワシは学校には行けんらしい。この腰のせいやと思う。

なんでかは知らんが、ワシの腰はお爺よりも曲がつとる。顔もちよつと歪んだ。ワシが立って歩く頃にはもう腰が曲がつとったらしい。お母がそういうとった。それで歩くのも遅いし、すぐにこける。

お爺はいつもみたいに「のろまが。」いいながら、ワシに合わせで止まりながら歩きよる。お爺はいつもみたいに、ワシを面倒くさそうに振り返っては、ため息やら舌打ちをしよるが、なんも悪い気はせん。こんなワシに合わせてくれよるお爺は優しい。ワシはお爺のことを慕つとる。歩きたびに、背中の籠がぐわんぐわんと揺れる。お爺に追いつこうと大腿でぐわんぐわんと歩く。

もうじき、いつもの竹ヤブに着く頃か。

いつもの竹ヤブ。ここは山の中腹ぐらいのところらしい。お爺が世

話しとるから、竹は綺麗に伸びて、並び方が美しい。竹の子の時期はもう済んだが、お爺の竹の子は、身が白くて軟らかくて、高くで売れる。ワシも竹の子は手伝うから、よう売れたと聞いたら嬉しい。この時はお爺とお母も機嫌が良い。そやから、ワシは春が大好きや。

春も好きやが、夏が終わって涼しいなってくる今みたいな季節も好きや。ヤブ蚊を払いながら、お爺の唄を真似して唄って茸を狩った。

かこおん

向こうの方で、かこおんと竹が鳴った。竹ヤブに来るたび、いつもかこおんと竹が鳴る。鳥の仕業か、獣の仕業か、風の仕業やろうと、今までは気にもせんかったが、なんでか今日はほんまのことを知りとうなった。百歩ほど奥の方で、腰を屈めているお爺に訊いた。

「お爺やあ、竹がかこおんと鳴るんは、鳥かあ？ 獣かあ？」

急に強い風が吹いて、さささささあ。と竹の葉が騒ぎ出した。お爺は耳が遠いから、その音でワシの声は聞こえなかったらしい。返事がほしかったから、背負ってる籠を降ろしてお爺のところまで歩いた。ここは地面が平らで足場が良いから、こけずに歩ける。ぐわんぐわんとみぎひだりに揺れながら、やっとこさお爺のところまで来た。

「お爺や。竹が鳴るんは何でや。」

お爺はいつもみたいに、ワシの方を見やんと面倒臭そうにいうた。

「タケナラシちゅう妖怪や。鳴ったところには近寄るなや。とって喰

われるぞ。」

「妖怪の仕業やったんか。」ワシは独り言をいうて、籠を取りに戻った。

かあん

向こうの方で、かあんが竹が鳴った。タケナラシが鳴らしよったな。と声を出さんというて、見たことのない妖怪の姿を思い描いた。背が低くて、竹と同じ肌の色で、髪の毛は赤でオカッパ。竹の子の皮でできた服を着とる。両手には短い竹を持つとって、美味そうな人間が来よったら、舌をべろんと出しながら竹を鳴らしよる。とつて喰われるて思ったら恐ろしいが、近くに妖怪がおりと思つたら、心臓がどんどんというて、知らん間にワシの顔は笑つとつた。

さつき降ろした籠を背負つて、茸を探してるとお爺に見せかけながら、ワシは笑いながらタケナラシのことばかり考えとつた。竹が鳴るたびに、ワシの心臓はどんどんというた。

結局、それから茸はひとつも採れんで、うちに帰つてどやされた。けども竹の音が耳にひつついとつて、お爺とお母の声はあんまり聞こえんかった。床についてからも、耳の中であの不思議な音が鳴つてゐる気がして眠れんかった。

次の朝早く、ワシは独りで竹ヤブに出かけた。タケナラシのことが気になって気になって、辛抱できんかった。

二節

道中に落ちとった棒つきれを拾って、そこらじゅうの樹やら岩やらを叩きながら歩いた。色んな音がして面白かったが、あのタケナラシの音よりええ音はせんかった。

ぐわんぐわんとゆっくり歩いて、やっとこさ竹ヤブに着いた。そんな時、竹の葉がわさささあ、というたかと思うと、かこおん。と音がした。タケナラシがワシが来たことをわかったんやないかと思うて、ワシは嬉くてなって、持とった棒つきれで、竹を叩いて回った。せやけど、やっぱりええ音はせんかった。

今度は細い竹の枝を拾って、竹をこするみたいにしゃかしやかしやかと鳴らした。なかなかええ音やったんで、しばらくしゃかしやかしやかとこすって遊んだ。

かあん

かこおん

遊んどる途中も時々タケナラシの音がして、ワシはタケナラシと一緒に遊んどる気がして、ほんまにほんまに楽しかった。今度は石ころを拾って竹にぶつけてやった。

こおん

やあ、タケナラシみたいな音がした。これはええぞと思うたが、

よう見たら竹に傷がついたんで、もうこれはせんとうと決めた。

ぐわんぐわんと竹ヤブを歩き回って、鳴らし回って、遊び疲れて、腹が減った。もっとタケナラシと遊んでいたかったが、家に帰るところにした。

やっぱりお爺とお母にどやされた。畑の手伝いもせんとうと出て行きよってからに。役立たずが。と、いつもみたいに叱られた。せやけどワシは、まだ楽しい気持ちが続いたから何とも思わなかった。今度はいつ竹ヤブに行こうか考えとった。

それから、ワシは毎日竹ヤブに行って竹を鳴らして遊んだ。何がおもしろいんやとお爺とお母はワシを馬鹿にしよったが、竹ヤブで遊ぶのが何をするよりもおもしろかった。

ある晩、竹が鳴った気がして目が覚めた。お爺とお母を起こさんように、そおと家を出た。また竹の音が聞こえた気がした。タケナラシがワシと遊びたいと言ってるんやろうか。丸こいお月さんの明かりをたよりに、なんべんもこけながら竹ヤブに行った。

夜の竹ヤブに来るんは初めてやったが、なんでか怖ろしくはなかった。お月さんに照らされたヤブは静かで、綺麗で、わくわくした。ワシはいつものように竹を鳴らして回った。やんわり冷たい風が吹いて、葉がひそひそ話をする中、タケナラシの音が向こうで鳴った。

「鳴ったところには近寄るなや。とって喰われるぞ。」

お爺が言うのとった。せやけどワシは、何でか音がする方に向かって歩いとった。タケナラシに会いたかった。喰われてもええから、会いたかった。ワシがおらんようになって、お爺とお母は何とも思

わんやろつ。もしかしたら喜ぶかも知れん。役立たずでのろまなワシは、妖怪に喰われた方がええかも知れん。

かああん

すぐ近くで音がした。

おった。

ワシのすぐ目の前の竹のすぐ向こうで、小さな影がひよこひよこ
と動いとる。

ワシはのっしのっしと身を屈めて近づいた。目の前にタケナラシ
がある。

ワシより少し背が低くて、頭のとっぺんが竹の子みたいに尖つて、
からだは竹の子そのもので、大きな足と大きな手かはえとる。から
だの真ん中よりちょっと上に顔があつて、まん丸い目に、おっきな
口。そんで、ワシとおんなじように腰が曲がつとる。ワシが思つて
たのと違つて、竹は持つとらんかった。まん丸くて赤い目でワシの
ことを見とる。ワシはびっくりしてしもて、力が抜けて尻もちをつ
いた。

タケナラシがおった。今、目の前におる。こんな嬉しいことはな
いのに、腰がぬけて力が入らん。ワシは口をぽかあんと開けて、竹
の子の妖怪を見上げた。

急にタケナラシは両の手をいっばいに広げて、胸の前で合わせる
ようにして手を打った。

かああん

乾いたあの音が鳴った。そうか、手を叩いてならしていたんか。
ワシは嬉しくて嬉しくてたまらんで、うわあと声を上げた。

タケナラシは大きな口を開け、白い歯茎を見せて、けたけたけた笑った。歯のない、赤ん坊みたいな顔をして、乾いた声でけたけたけたと笑った。

三節

昨夜のことは夢やったんか。いいや、夢ではない。寝巻きには土や竹の葉がついとる。竹の匂いもする。確かにタケナラシに会ったんや。あの笑った顔が、ぶわっと思ひ浮かんだ。にたにたと笑いなから朝飯を済ませた。

今日は一日中、畑の手伝いをした。

西の空が、赤く染まり始める。秋の日はつるべ落としというて、すぐに日が暮れるらしい。ワシは鋤を納屋に片付けたら、竹ヤブ目指して大急ぎでぐわんぐわん歩いた。

またおった。

待ってくれとったんか、タケナラシはワシの顔をみるなり、かこおん。と手を鳴らした。

ワシと同じくらい腰が曲がってるのにタケナラシは身軽で、早く走れることもできた。でもタケナラシはワシの歩く早さに合わせてくれた。お爺が急かすのと違って、タケナラシは優しく見守ってくれてるみたいやった。

二人で竹を鳴らしたり、落ち葉で面を作ったり、かくれんぼをしたりして遊んだ。タケナラシはしゃべらんが、からだの動きを見たら何が言いたいんかようわかった。

もう日が暮れた。

「また明日な」というて、タケナラシに手を振った。タケナラシ

は、竹の枝でかしゃかしゃと竹をこすって、けたけたたと笑った。さつきワシが教えてやったことが気に入ったみたいや。ワシも真似してけたけた笑った。

暗い帰り道、ワシは考えとった。

誰かと遊ぶちゅうことがこんなに楽しいもんか。今までは独りで遊んだことしかなかったが、こんなええことがあるんか。毎日でも竹ヤブに來たいなあと思うて帰った。

帰ったらどやされるかと思うたが、今日は何でも言われんかった。そんで晩飯は今まで食ったことがないくらいうまかった。いつもと変わらん晩飯やったのに。

次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、ワシはタケナラシと遊んだ。

やっぱりタケナラシはしゃべらんが、そんなことはどうでもええ。やっぱりワシの腰は曲がつとるが、そんなことはどうでもええ。そんなことは氣にもならんぐらい、ワシらはワシらだけの遊びをした。

タケナラシは優しくかった。ワシがこけたときはいつも手を貸してくれた。あんまり痛いときは大きな手で抱いて、さすってくれた。その後は決まってけたけたたと笑った。その後ワシは決まってけたたと真似して笑った。痛みなんかどっかに行った。

タケナラシと一緒に居ると、ワシは嬉しかった。誰と居るよりも嬉しかった。ワシは誰かに抱かれた憶えがない。負われたこともないと思う。死んだお父はよう抱いてくれてたようやが、あんまり小さかった時のことやから憶えとらん。せやから、優しくされることなんて生まれて初めてのことがやった。

夜になったら「はよ明日になれ。」というて、雨が降ったら「はよ晴れになれ。」というた。

タケナラシが居らん毎日は考えられんかった。

幸せゆつのは、こついつことなんやろつな。

四節

春や。タケノコを掘る時期になった。

ワシはタケノコを掘りとうなかった。タケナラシはどう思うんやろうか。そんなこと考えて手がなかなか動かん。せやけども、ワシらもメシを食わんな死んでまう。おんなじ命や。いややけどもワシはタケノコを掘る。

「すまんタケナラシ。すまんタケノコや。おおきにな。」

そう言うて、喉の下がすうんとしんどくなるのを辛抱して掘った。掘るたびに手や足が「動きとわない」と言っているようで、どうにかタケノコだけを掘らんで済まんやろうかと思いつながら掘った。

どすどすどすどすん

むこうでおかしな音がした。ううんとお爺の声が聞こえる。ワシは急いでお爺の声がする方へ急いだ。

お爺が苦しそうな顔をして、足を抱えて唸ってる。きつい坂から転げ落ちたみたいや。

足に掘りが刺さって、どんどん血が流れて、お爺の顔が青いような白いような色になってきた。

助けを呼んだが誰も居やんようで返事がない。お爺を抱えてヤブを下りようと思うが、ワシの力ではどうにもできん。お爺の顔が

もつと白くなつてきて、どうしたらええのかわからんようになつて、ワシは、ワシはもう泣きそつで、何にもできんまま「お爺、お爺」と呼んでいた。

かあん

タケナラシの音がした。

「タケナラシ、助けてくれ。お爺が大変や。タケナラシ、助けてくれへんか。」

ワシがそう言うのとタケナラシが目の前に現れて、かこおんと手を打った。そんでけたけたたと笑った。

びしつ。とワシの背中の骨に稲光が走った。力が湧いてくるみたいやった。

またタケナラシが手を打ったら、もつと力が湧いた。タケナラシは、何回も何回も手を打っては白い口を見せてけたけたたと笑った。そんでそのまま小さくなって消えてしもた。

お爺を持ち上げられる気がしたからやつてみた。ひょいと軽く持ち上がった。ワシはお爺を負うたまま走ってヤブを下りた。びつくりするぐらいすいと速く走れた。そのお陰でお爺は助かった。村の医者がようやったなあとワシを褒めてくれた。ワシは嬉しくしょうがなかった。

もつと嬉しかったのが、腰が真っ直ぐになったことやった。顔も歪んどったのが整った顔になって、お母もたいそう喜んどった。

仕事もおとなみたいにできるようになった。学校にも行かしてもらえようになった。村の子らも遊んでくれるようになった。ロクヤン、ロクヤンというて慕ってくれた。ワシは村の皆が好いてくれるワシになった。動けんようになったお爺の分も働いた。子どもを集めて遊んだ。ワシは村の誰もが好いてくれるワシになった。タケノコの時期が終わって竹ヤブにも行かんようになった。あれから姿を見せんようになったタケナラシのことも、もう呼ばんようになった。それでもワシはしあわせやった。

また秋が来た。タケナラシと初めて会った秋。

また茸を採りに竹ヤブに来た。竹をしゃかしゃか鳴らしたり、手を打ったりして久し振りにタケナラシを呼んだ。せやけどなんの返事もなかった。

「もうワシのことは忘れてしもうたんじゃろう。」

そう思つて、すいすいと竹の間をくぐりながら茸を採つていった。

何べんもヤブ中を見回してみるが、おるのはだいたい虫ぐらいで、妖怪の姿はどこにもない。あの「かあん」ちゅう綺麗な竹の音もせん。

茸を採つては顔をあげ、竹の間を縫つて向こうの方をぐるりと見渡す。そんな悠長にしとるもんやから、籠の中の茸はなかなか増えん。また茸を採つては顔をあげ、竹の間を縫つて向こうの方をぐるりと見渡す。

そうこうしているうちに籠が一杯になった。

「薄暗うなってきたし、もう帰るか。もう帰ろう。」

竹ヤブの隅まで響くぐらい大きい声で独り言を言った。声はすると奥の方へ消えていった。今まで騒がしかった虫の音が消えて、しいんとヤブが静まった。ワシは目をつむってみた。

その時、奥の方で竹の音がしたような気がした。「かあん」というあの音やったんかどうなんかはようわからんが、何となくそんな気がした。ワシはもういっぺん「もう帰ろ。」と、小さい声で言うてみた。音が聴こえるような気もせん。

「気のせいやったかなあ。せやけど気のせいやないかも知れんなあ。」

また大きい声で言いながら奥へ進んで行った。

ほんの少し歩いて、すぐ目の前。

一本の曲がった竹を見つけた。

すぐにわかった。

「タケナラシ。」

呼んでもひとつも動かん。喉の下がすうんとしんどくなった。

五節

お爺の足はだいぶようなって、畑仕事ぐらいやったらワシの手伝いがなくても出来るようになった。ヤブまで行くのはまだしんどいみたいやから、ヤブのことはワシが全部やることになった。全部やることにはなっとるが、ほんまはヤブに行つてただけでヤブの世話なんかひとつもしとらん。ワシがやることはひとつ。

ここんとはずっとタケナラシの竹の前で話をしとる。朝から晩まで。タケナラシの周りをぐるぐると廻つてみたり、タケナラシにもたれて口笛を吹いてみたり。

「タケナラシが助けてくれてからワシは人気もんになったんやぞ。もうこの村で除けもんにされとる子どもはおらん。みな仲良う遊んどる。お前のお陰やぞ。」

と、言つてみるが、何の返事も無い。ざわざわと葉っぱが揺れることもない。

「なんやお前、怒つとるんか？」

と、言つてみるが、何の返事も無い。わさわさと葉っぱが揺れることもない。

「どないしたんや！タケナラシ！」

言つてみるが何の返事も無いし、すうと葉っぱが揺れることもない。そんなことを何日も繰り返してる。なんでタケナラシは何も言わんのやろつ。

一旦はなんでやろつと考えるが、いつもすぐに同じことを思いつ

く。

いいや、それは考えたらあかんのや。タケナラシは疲れて寝てるだけなんや。間違いない。

ここまでヤブを放つたらかしにとったもんやから、さすがにお爺も気がついたみたいや。前みたいに、ため息やら舌打ちやらをしよっちゆうするようになった。ワシの腰も前みたいに曲がってきた。ワシのことを褒めるもんは誰もおらんようになった。それでもワシは毎日毎日ヤブへ出かけた。

だいぶと寒くなってきた頃のある朝、ワシはタケナラシの竹に稲のようなもんがぶら下がっているのを見つけた。これは一体なんやろうかと頭を捻った。

どこかで聞いた覚えがある。

そう言えばお爺が言うとした。竹は百年にいつぺんぐらい花をつけて、その花が終わったら枯れてしまうんや。と。
ちゆうことは、

もっじきこの竹も枯れて、枯れてしまうんか。

そうか・・・。

枯れてしまうんか。そうか・・・。

そう思たら腹わたを鷺掴みにされたみたいに苦しくなった。血の気がさあと引いてふらふらとなったかと思うと、そのままワシはへたりこんで、終いに横になった。空を見上げれば、竹の先が雲に届

きそうやった。もしかしたらもう刺さってるんかも知れんなあ。と、わけのわからんことを考えて、沢山雲が流れていくのをばけつと見とった。

夕暮れの朱くて黄色い色が竹を染めている。ゆっくりかぶさってきた大きな黒い雲が、それを塗りつぶそうとしている。ワシは立ち上がって、ヤブの湿った匂いを思いつきり吸うた。そんで両手を目一杯横に広げて、息を思いつきり吐きながら、勢いをつけて手を打ち鳴らした。

「ぺんつ。」

情けない音がした。

なんでか涙が出てきた。

タケナラシと初めて会ったあの晩、目の前で手を打ち鳴らした姿が思い浮かんだ。けたけたけたと笑うあの顔が思い浮かんだ。ワシを助ける為に小さくなって消えてしもたタケナラシは、曲がった竹になってしもて、今にも枯れようとしている。

ワシは、なんべんもなんべんも手を打ち鳴らした。なんぼでも流れてくる涙も拭かんと、ぺんぺんと情けない音を鳴らして歩き回る。曲がった竹の周りをいつまでも廻る。脚は虫に咬まれて血だらけで、手は腫れあがってびりびりする。眼は開けてもつむつても痛い。きつとタケナラシみたいに赤くなってるんやろう。

空が真っ暗になった頃、打ち合わせた掌に氷の粒が挟まった。さっきの黒くて大きい雲がぎょうさん雪を降らしてきよった。

足の裏から頭の先まで氷の冷たさが凍みて、そのせいで胸が苦しいのも全部わからんようになってくるような気になる。ワシは枯れ

そんなタケナラシをそこに置いて、家へ帰ることにした。また雪がやんでから来たらええんや。ワシの涙はもうやんだぞ。

こけながら、こけながら、ぐわんぐわんと下って帰る。だんだん雪が積もってきて動けんようになりそうやったけども、曲がつたからだを揺らしながらやつとこさ家の前に着いた。やつとあつたかい晩飯を食うて床につける。そないに思たら腰が抜けて戸口の前で倒れてしもた。

お爺を呼ぼうと思て口を開いたけども声が出ん。なんぼ搾り出そう思ても出ん。ワシは痺れた手にいっぱい力をこめて古ぼけた戸を叩いた。

足を引きずって歩くような足音が近づいてきて「ロクか。」とお爺の声がした。返事が出来んかったから、もういっぺん戸を叩いた。ようやく戸が開いた。

出てきたお爺の顔を見たらワシはなんや嬉しくなつて笑つてしもた。

けたけたけたつ

お爺は眼をひんむいて「ひいっ」と声を上げたかと思うと、ばけもんにでも出くわしたような顔をして尻もちをついた。奥から顔を出したお母も、ワシを見るなり「ひいっ」と言つてぶっ倒れた。

お爺は身を震わせながら土間にあつたつつかえ棒を掴み、ワシの腹をめいっぱいに突いた。今まで感じたことがない痛さがからだの中を走つた。

ワシはごろごろと後ろに転がつて、戸がばしんと閉まる音を聞いた。

「ば、ばけもんが！出て行け！ヤブ・・・ヤブへ帰れ！」

お爺が怒鳴った。

ワシはまたお爺にどやされた。

ワシはもう、どこも行くところが無くなってしもた。雪の冷たいのなんか、もう、何も感じんかった。

またタケナラシの所に来た。

真っ暗な竹ヤブの中、いつものようにタケナラシにもたれとる。降りてくる雪のひとつひとつがぴかぴかと光ってるみたいで美しかった。

時々吹く強い風が、竹の枝に乗っていた雪をさらっていった。

深く積もった雪の中、ワシは手を打ち合わせる。もうひとつも鳴らん。

タケナラシの花がそつと揺れて、

とびきり大きな風が吹いた。

ざわざわっ、ざわざわっ、とヤブ中の竹がひとしきり大騒ぎして、静まり返った。

ワシは立ち上がって、全部の全部を振り絞って、手を打ち鳴らした。

かあああん

またタケナラシの花が揺れた。

聴こえる。

タケナラシの竹が笑っている。
ワシも一緒になって笑う。

けたけたっ

けたけたけたっ

五節（後書き）

最期まで読んでくださって有り難う御座います。

竹藪に囲まれた地域に住んでいる僕は、竹や筍に親しんで育ちました。

竹藪の中で、あの乾いた「かこおん」という竹の音を聞く度、不思議な存在を想像せずにはいられませんでした。

僕の原点である「竹」を描いたこの物語は、初めて書き上げた作品としてふさわしいものであったと思っております。ご意見、感想など頂きたいと思っておりますので、宜しければお願いします。

さて、実はこの話には続きがあります。エピソードみたいなものです。

本編に含まれるとスッキリし過ぎるのではないかと、そんな気がしたので、後書きとして紹介させて頂きます。

||||||||||||||||

また春が来た。

村も竹の子の季節を迎えた。

「村はずれのとこの口クが竹の子の妖怪に食われた。」という噂は、村じゅうに広まっていた。竹に花が咲くと、その年は凶作になると言われている。しかし、今年はどこのヤブも竹の子がよく出ているから、祟りだの何だのと言って村の者は気味悪がっていた。そ

れでも質の良い竹の子がぼんぼんと出てくるものだから、いつの間にか皆「神さんの恵みや。」と言って喜んで掘るようになった。

少し時が経ち、竹の子の季節が終わる頃。子どもたちが妙なことを口にするようになった。

子供同士で喧嘩をしたり、ひとりの子を除け者にしたりしていると、「あかあん、あかあん。」と、奇妙な竹の音がどこからともなく聞こえて来た、と言ったり。仲間に入れてもらえずひとりで遊んでいると、顔と腰が歪んだ竹の子の妖怪が遊んでくれた、と言ったり。

無論、村の大人は誰も相手にしなかったが・・・。

村はずれのロクのお爺とお母は、そんな話をきく度、雪が降ったあの日に居なくなってしまったロクのことを思い出した。

出来損ないだと罵っていた小さな子どもは、本当は心の優しい良い子であったのだ。と、今になって思うようになっていた。ただ身体が不自由であっただけで、使い物にならないなどと思っていた自分を恥ずかしく思っていた。ロクの父親の代わりにしてやろうと思っていたことを情けなく思っていた。

「またロクやんに遊んでもろた。」と、村の子どもから聞かされたある日、ロクのお爺とお母は竹ヤブへ出かけた。

誰も手入れをしなくなったヤブで、お爺が叫んだ。

「おうい。ロクう。聞こえるかあ。」

繁ったヤブからは何の返事も返ってこない。

「ワシらが悪かった。戻って来おい。もういっぺん皆で暮らそうやあ。」

しばらくしいんとして、すぐそばで竹の音が鳴った。

あかあん、あかあん

涙混じりにお母が言った。「そうかあ、戻ってこんのかあ。」

こおん、こおん

もう何を言おうが、それ以上竹の音は鳴らなかった。二人は泣く泣くヤブを下りた。

この村には妖怪が出る。

とても優しい、竹の子の妖怪。

何十年、何百年経っても、子どもたちから妖怪の話が絶えることは無かったそう。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8624a/>

タケナラシ

2010年12月23日14時22分発行